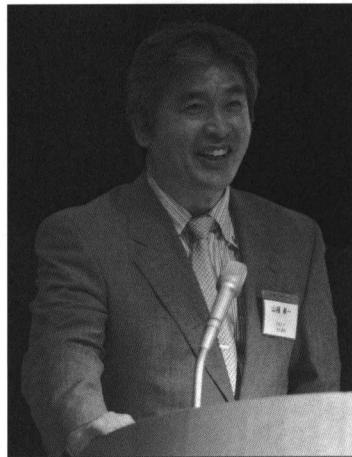


# 野生のゴリラと野生の子ども

京都大学大学院 理学研究科教授  
**山極 寿一氏**



## PROFILE

山極寿一（やまぎわ・じゅいち）  
1952年、東京生まれ。1978年から、アフリカ各地でゴリラの野外研究に従事。現在はゴリラとチンパンジーが熱帯林の同じ場所でどのように共存しているか、他の生物といかに共進化してきたかを研究している。類人猿の行動や生態をもとに初期人類の生活を復元し、人類に特有な社会特徴の由来を探っている。1970年代初めから屋久島でニホンザルの野外研究を実施するとともに、エコミュージアム活動を推進。アフリカでもゴリラと人との共存をめざしたNGOボレボレ基金に参加して活動している。著書に『家族の起源——父性の登場』（東京大学出版会）、『ゴリラの森に暮らす』（NTT出版）、『ジャングルで学んだこと——ゴリラと人の父親修行』（フレーベル館）、『父という余分なもの——サルに探る文明の起源』（新書館）などがある。

## ゴリラと人間の進化

本日は、お招きいただきましてありがとうございます。私は26年間、ゴリラの研究に携わってまいりました。今日は子ども、野生、ゴリラの3つをキーワードにしてお話をていきたいと思っております。

私たち人間は700万年ぐらいの進化の歴史を持っていますが、農業がこの世に出現したのが約1万年前ですから、700万年のうちの1万年間が栽培植物を手にした時代なわけです。さらに、都市文明が起こってきたのが3,000年から5,000年ぐらい前ですから、私たちは人間は、本当に短い時間、こういう都市生活を経験しているにすぎないわけです。つまり、人間の進化のほとんどは、自然に手を入れずに付き合うという野生生活に適応するようにつくられているのです。心も、体もです。

ただ、進化史の中では、心よりも体の方が先に完成しています。心というのは後から出てきたものです。ですから、まずは体ということを中心に考えてみた方がいいのではないかと思います。なぜかと言いますと、私たちは五感を駆使して心というものを作動しているわけです。体全体を使って外界を感じし、自分の体を、そして体を取り巻く世界を利用しているわけですから、それを重要視して人間というものを考えてみる必要があるのではないかと思うのです。特に子どもは、自分のすべてを使ってそれを確かめていく過程にある存在ですから、非常に重要です。

それから、子どもというのは、何でも受け入れながらどんどん変わるという特性がある一方で、たとえば言語のように、ある時期に習得しなければ生涯身につけられないという特性を併せ持っています。時期を誤ると、子どもの成長がとんでもなく大きな障害を持つことになります。そのことを考えてみる必要があるだろうと。以上のようなことが、これからお話しすることの前提です。

では、なぜゴリラかという話ですが、人間の進化は200万年から300万年ぐらい前に、人間「ホモ」がオーストラロピテクスという別の属と分かれたわけです。人間はその後、たくさんの種を隣人として生み出しましたが、それらはすべて



ガボンの熱帯雨林

滅びてしまい、現在、人間はホモ・サピエンスという1種だけです。ところが、私たちが大型類人猿と呼んでいる霊長類、ゴリラやオランウータンやチンパンジーは、別の種を持っています。オランウータンはボルネオ島とスマトラ島に別々の種に分かれて暮らしていますし、ゴリラは西ゴリラと東ゴリラに、チンパンジーは、チンパンジーとボノボという種に分かれています。彼らは、200万年前から300万年前ぐらいに分かれた兄弟を持っているわけです。

つまり、人間がどのように進化、発達してきたのかということについては化石しか材料がないわけですが、オランウータンやゴリラやチンパンジーは現存の種として持っているわけですから、それを比較することは、この200万年間、300万年間に、どのような変化が我々の体にあらわれたのかということを知る上で非常に大きなヒントになります。類人猿を研究するというのは、そういう意味なんですね。

## 野生のゴリラが暮らす環境とは？

さて、野生のゴリラが暮らす環境は、まずは熱帯雨林です。熱帯雨林というのは、ご存じのように高温多湿で、非常に多様な植物、動物が暮らしているわけです。この写真は、私が現在研究しておりますガボンの熱帯雨林ですが、年間2カ月ほど乾季があるだけで、その他は雨季といえます。雨季は月間降雨量が60mm以上、年間の降雨量は2,000mmに達します。

そうした場所で、ゴリラがどういう暮らしをしているのかといいますと、ゴリラのオスの体重は200kgを超えることがありますし、メスも100kgに達することがありますから、地上の暮らしに適しています。しかし、ゴリラの大好物は果実です。もちろんゴリラは多種多様な食物を食べますが、何でも選べるときは最初に果実を選びます。そして、果実はほぼ木の上の方にありますから、木に登らなくてはなりません。つまり、ゴリラは地上と樹上を非常に広く使って暮らしているわけです。

でも、果実というのは、とりわけ熱帯雨林では、木の上だけにあるわけではないんですね。熟すれば落ちてきますし、幹の下の方に房状の実をつける果実もあります。しかし、果実は未熟な時には毒——毒というのは神経毒のアルカロイドであったり、タンニンやリグニンといったような消化阻害物質だったりするわけですが——を含んでいますから食べられません。ですから、ゴリラに限らず、そこに暮らす生き物たちは熟した果実を感じて、なるべく早くそれを摂取するという行動を身につけなければ生きていくことができないわけです。つまり、子ども時代というのは、その環境の中で食べられるものを的確に探し当てる能力を磨く時代だといっても過言ではないでしょう。

森の中を歩きますと、非常に多様な果実を見ることができ

ます。この写真のイガイガのある果物は、中にマシュマロみたいにふわふわした甘味のある物質が入っていて、すごくおいしいんですね。足で踏みつけなくても、手ですと割れるイガです。でも、このまま食べられないので、とにかくイガのついた殻を割る技術を学ばなくてはなりません。

また、果実が得られない時には、代替するもの、たとえばアフリカショウガという植物のズイなどを食用にしています。ですから、これがだめなら次はあれというように、補完する食物も頭の中に入れておかなくてはならないわけです。

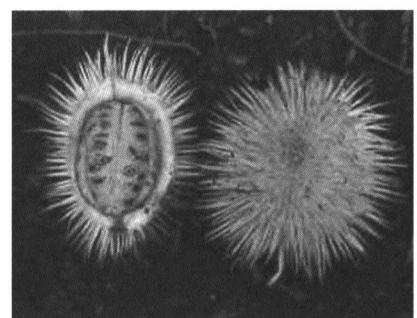
このように熱帯雨林は非常に豊かな食物を供給してくれる場所ですが、一方で大きな危険もあります。ほかの動物がたくさん住んでいるからですね。皆さんは、カバは草原性の動物だと思っていらっしゃるかもしれません、熱帯雨林の中にもいます。この写真の手前にいるのは子どもカバですが、前を歩いているのはお母さんカバで、子どもだけが私に気づいてちょっと振り返ったところです。お母さんカバが気づいて突進してきたらと思うと、生きた心地がしませんでした。

ゾウも、森林性のゾウがいます。これはマルミミゾウといって、牙がまっすぐな、体の小さなゾウです。しかし、小さいといって牛より大きいですから、出会ったら必死で逃げるかもしれません。ゴリラもゾウに出会うと、板根と呼ばれる板のように木の根元が張り出しているものの陰に隠れたりします。

ここまでご紹介してきましたのは低地の熱帯雨林なんですが、アフリカには大地が隆起して、標高4,000m～5,000mの山がそびえている地域もあります。霊長類ではゴリラだけが住む場所として有名なのは、中央アフリカのヴィルンガ火山群の3,000m以上の亜高山帯です。ゴリラは、ほかの霊長類にはない能力を身につけることによって、こんな冬には冠雪を抱くような高所でも、暮らせるようになりました。

その能力というのは、とげのあるイラクサを食べる技術です。イラクサのとげは針のようで、ちょっと触れただけでも電気が走ったように痛くて、腫れがなかなか引きません。ただ、イラクサは、とげという防御壁を設けたことで毒を仕込む必要がないので、とげを取り去れば食べられるんです。ゴリラは、そのとげを取り去る技術を心得ています。それがゴリラにしかできないのは、左右の手を上手に使い、複雑な手順を経て取り除かなくてはならないからなんですね。イラクサを食べる霊長類は、ゴリラ以外にはいません。

また、木の上にはゴリラの食べられるさまざまな蘚



イガイガの果物



苔類（コケ）があります。ですから木の上に登る技術も必要になる。地上や樹上でどのような生活を自分で工夫していくかということが、ゴリラの子どもたちにとっては、まず学ばなくてはいけない大切なことになります。

## ゴリラの子どもの成長

次は、ゴリラのベッドの話です。ベッドづくりは、ゴリラに限らず類人猿が共通に持っている特性ですが、ゴリラは毎日、1人1つずつ新しいベッドを作り、そこで眠ります。子どもの頃は自分でベッドを作れませんから、お母さんのベッドに寝ていますが、だんだんと不器用ながらも自分でベッドを作り始めます。ちゃんとしたものができるようになるのは5歳くらいで、木の上にも木の下にも、きれいなベッドを作るようになります。

ここで、ゴリラの子どもの話をしましょう。ゴリラは生まれた時の体重が1,800gくらいですから、人間と比べても非常に小さい。ところが、5歳になると50kgにもなり、10歳を超えるとオスだと160kgぐらいになる。つまり、ゴリラは「小さく産まれて大きく育つ」わけです。

ともあれ、生まれた時は小さいので非常に長い間お乳を吸います。1年間は、ほとんどお乳だけで、3年間はお母さんのおっぱいからお乳を吸って育ちます。お乳を吸っている間、お母さんは妊娠しませんから、4年に1回、子どもが生まれることになります。妊娠期間は258日です。人間の場合より、ちょっと短いです。

お母さんは、お乳をやっている1年間は、決して子どもを手放しません。ハイハイをするようになると、手の届くところまでは離しますが、それ以上は離しません。ところが、1年を過ぎてお乳以外のものを口にするようになると、非常に大胆な行動に出ます。オスに、子どもを預けてしまうんですね。これを、我々は「子育てのバトンタッチ」と表現しています。驚くほど鮮やかに、子どもはオスになついていきます。子どもは、お母さんの方にお乳を飲みにやってきて、お乳を飲み終わるとすぐにオス、お父さんゴリラの方に行って、日がな1日、お父さんゴリラの後をついて歩き回ります。

また、子どもは、小さいうちはお母さんのベッドの中で眠りますが、3歳くらいになると、お父さんのベッドの中で寝るようになります。そして、初めて自分のベッドを作る時は、お父さんのベッドの隣に作るんです。つまり、ゴリラの子どもは、自分が依存する対象を母親から父親のほうに移していく、そういう成長過程をたどるのだということを覚えておいてください。

オスが子どもを育てるという種は、霊長類でもそれほど珍しくありません。ただ、オスが子育てに加わるやり方が、それぞれの種で違います。特に有名なのが、中南米に生息しているポケットモンキーといわれるタマリンやマーモセットと

いう小さなサルの例です。このサルは、生まれるとすぐにオスが子どもを抱き上げ、体をなめてきれいにしてやってから母親のところに抱いて運びます。そして、母親が授乳してやるんです。

こういった父性行動が霊長類のある種にだけ進化したことには、理由があります。まず、こういう小さなサルは、頻繁に双子や三つ子を産むんです。それから、新生児が大きい。これが2匹も3匹も生まれたら、母親には非常に大きな負担がかかります。しかも、主食となる食物は昆虫なんですが、昆虫は動きますから素早く動いて捕らなくてはいけないのに、体重の重い子どもをいくつも抱えていてはできません。つまり、オスが子育てに参入することが母親の負担を減らすことになって、それが進化的に非常に重要な役割を果たしたと考えられます。事実、タマリンやマーモセットのオスは、子どもたちが自力で昆虫を捕らえることができるようになると子育てをしなくなり、ほとんど子どもと接触しなくなります。

もう一つの例を紹介します。これはサバンナヒビのオスとメスと子どもの映像です。仲むつまじい親子のように見えるかもしれません、実はこのオスと子どもは血縁関係がありません。メスとも、長い知り合いではありません。サバンナヒビは、オスが集団を渡り歩くという特徴を持っていて、いつかは別の集団に入っていかなくてはいけません。オスは新しい集団では、一番弱い存在となります。いじめられる存在です。それを防ぐためには、幼い子どもと仲良くなるのが一番の手段なんです。幼い子どもを抱いていれば、その子の母親がそのオスを庇ってくれるし、ほかのオスも攻撃しにくいわけです。つまり、子どもはそのオスにとって、安全を保障する手段になるわけです。ただ、これも子どもが小さいうちだけで、子どもが大きくなるとそういう関係は途絶えてしまいます。

それに比べると、ゴリラの父性行動はちょっと違います。まず、その背景として、ゴリラの社会が、ヒヒのようにオス



ヒヒの子育て

ゴリラ遊び笑い



が集団間を移動する社会ではなく、メスが集団間を移動していく社会だという違いがあるわけです。すなわち、オスが別の集団に入るという事態が起こりませんから、子どもと親しくなる利点がないわけです。

また、ゴリラの場合は1年間はお母さんが子どもを離しませんから、オスも無関心です。子どもが1歳を過ぎると、母親がオスのそばに子どもを置くようになるわけですが、それまではオスは積極的に子どもに近寄ろうとはしません。母親と子どもがまずオスに近づいてくるわけです。母親が子どもを置いてその場を立ち去ってしまうと、子どもは最初のうちはお母さんの姿を探しますけれども、だんだんオスに慣れますし、オスのそばには他の母親に置き去りにされた子どもたちもいますから、その子どもたちとも遊ぶようになります。

そのオスと子どもたちのつき合いは、子育てというよりは、むしろ遊びです。遊びの種類は、他のサルと同様にレスリングや追いかっこが主ですが、ゴリラが他のサルと違うところは、オスと子どもの関係が、思春期を過ぎても継続することです。子ども同士が遊んでトラブルが起こると、オスはトラブルを非常に注意深く仲裁します。仲裁は、子どもたちが対等につき合うことに役立っていると考えられます。

## ゴリラの遊びと社会性

ゴリラの遊びの特徴の一つは、笑い声を出すことです。プレイパントというんですが、遊びの最中にゲタゲタゲタと笑うんです。この笑い顔と笑い声が、遊びを長引かせる一つの道具になるわけです。そして、ゴリラは年齢の異なるもの同士の遊びが多いんですが、よく笑い声を立てるのは常に、年下の子どもの方なんです。ですから、笑い声や笑い顔は、恐らく年齢の違う子どもも同士が遊びを長続きさせるのに大きく貢献していると思われます。

また、キング・オブ・マウンテンと呼ばれる遊びがあります。訳すと、まさしくお山の大将ごっこなんですねけれども、上方に登った子どもゴリラが胸を叩きます。下のゴリラは知らんぷりをしているわけですけれども、上のゴリラが降りると、今度は知らんぷりをしていたゴリラが上に登って胸を叩く。そういうふうに、上に登っては「やい、おれの方が強いぞ」というふうにやり合のが遊びになっているわけです。互いに威張りあうという性質の遊びが起るのは靈長類では非常に珍しいんですけども、ゴリラではよく起ります。

遊びというのは、経済性というのが欠如していますね。たとえばレスリングをすれば非常に体力を使いますが、体力を使った以上の利益や報酬は期待できません。もともと遊びは利益を期待したり、はっきりした目的をもたないものなんですね。

それから、普通の行動なら、どちらかが強ければ相手に強

制したりしますが、遊びは強制したら続かなくなっちゃいますね。逆に、遊びは自分の力を抑制して相手に合わせなくちゃいけない。これをセルフ・ハンディキャッピングと呼ぶんですけれども、自己抑制によって相手と同調できる。抑制と同調というのは必ず年上の方に起こるというのがゴリラの遊びの特徴です。

また、遊びというのは双方が積極的に関与しなければおもしろくありませんから、双方がお互いに努力をして遊びをつくり上げていくという特徴を持っています。そのために、大きさに手を振り上げたり、もったいぶって逃げたり、怖い顔をしたりというふうなことが起こるし、一見、無駄なように見えることが繰り返されます。それが楽しいんです。遊びの源泉は、楽しさです。

人間以外のほかの靈長類と比べると、類人猿の遊びは非常に長く続くんです。ゴリラでは、1時間続くこともあります。それから、非常に多くの遊びがあります。お人形さんごっこもしますし、電車ごっこみたいに数珠つなぎになって歩くこともあります。他の動物と遊ぶこともありますし、一人遊びもする。

それから、ほかのサルにはあまり見られないことがあります。性的遊びもあります。交尾のまねごとをするわけです。生殖器に興味を示す。これは非常に多いです。人間でもお医者さんごっこという遊びが文化を超えてあるんですけども、ある意味では共通しているものかもしれません。

ゴリラの遊びをもう少しご紹介しましょう。これはレスリングですが、2頭で遊んだり、3頭で遊んだりと、いろいろな組み合わせをして喜ぶんですね。これは口に草をくわえていますが、威張ってみせる時のポーズです。後ろでぐるぐる回りを始めましたが、これは一人遊びです。そうすると、ほかの個体がやってきて一緒に遊ぶわけです。これは首を振っていますが、遊びのサインです。手前の子どもが気がついて、一緒に遊ぶんですね。これは体の大きさがすごく違うんですけども、非常に見事に自分の力を抑制して子どもと遊んでいます。子どもが大丈夫だとわかると、ちょっと乱暴になつて振り回したりしていますけれども、立ち上がりやすくひざを折ってやっています。子どもが常に笑い声を上げているので、怖いわけではなくて楽しんでいるということが大きなゴリラにもわかるわけです。

もう一つ、ゴリラにはドラミングという、胸を叩く行動があります。長い間、誤解されていて、相手を威嚇する時にする行為だと皆さんも聞いたことがあるかと思いますが、それだけではないことがわかつきました。たとえば、他人の行動が我慢できないという時に自己主張をしたり、何かに非常



に興味を覚えて好奇心でわくわくしている時や、うれしくて興奮している時などに使うんです。1歳ちょっと過ぎたぐらいで、もう胸を叩いて遊ぶようになりますし、同時に胸を叩いて遊び合う。ちょうど太鼓を叩いて遊ぶようなものです。先ほどのお山の大将ごっこでも、ドラミングが出てきましたね。ゴリラのコミュニケーションにとってドラミングというのは、非常に重要な意味を持ちます。ドラミングを覚えなければ、ゴリラの子どもは社会的にきちんと成長できないということになります。

それからもう一つ、この映像は青年ゴリラと子どもゴリラが交尾のまねごとをしているんですが、オス同士です。子どもの遊びの中であらわれる性的な遊びは、相手の性を問いません。オス同士が一番多いんですが、オス同士でもメス同士でも行われます。また、大人になってもあらわれることがあります。性的な気分というものを、遊びの中でずっと持続させていくことがゴリラの場合にはできるわけです。

こうした遊びを通じて、ゴリラは互いに非常に対等なつき合いをするようになります。けんかが起こると顔を見合わせて仲直りをしますし、大きなオス同士がけんかをした場合は、若いゴリラが間に入って仲裁をするということをします。たとえば、けんかをしている2頭の間に、だつと駆け込んでくるんです。子どもやメスが入ることもあります。それで、双方の顔をじっと眺める、顔をのぞき込むんです。すると、オスはだんだん後ずさりをして、誰もいない方に向かってドラミングをして興奮を鎮め、けんかが鎮静化してしまうというようなことがよくあります。

ゴリラは、自分が強いとか弱いということをあまり表面化させずに、対等につき合おうとするんですね。だから、けんかになって仲裁者がいないと、とことんやってしまうことがあります。多分、仲裁者が出してくれることを彼らは期待しているんだと思います。仲裁者がいないとお互いのメンツを失



けんかの仲裁

わざに引き分けることができませんから、第3者の介入が必要な社会に生きているというふうに思います。こういう遊びやさまざまな出会いを通じて、ゴリラは仲間と親しい関係をつくっていきます。

## 二つの親しさとインセスト・タブー

ただ、我々、霊長類学者から言わせると、親しさというものはいくつかの種類があります。一つは、親子兄弟の親しさです。もう一つは友人の親しさです。これは多分、違うものです。親子兄弟の親しさというのは、基本的にいえば幼い頃からの顔見知りで、ゴリラの子どもとお父さん代わりを務めるオスのように、頼り、頼られる関係です。しかも、交尾が可能な年齢になると性的な抑制がかかる。性的興味を覚えない対象というのが、親子兄弟の親しさなんだろうと思います。

友人の親しさというのは、敵対よりも共存を選ぶ、協力を選ぶということになります。相互に友人であるという了解が必要です。それはコミュニケーションによってつくられなくてはなりません。しかし、同性はライバルになりかねない。つまり異性をめぐって、あるいは食物をめぐって、今日の友は明日の敵といった関係になる可能性もあるわけです。また、異性は交尾相手になります。これが、親子兄弟の親しさと全く違うところです。そして、協力には恐らく見返りが必要になります。協力したからには、その行為に応分の報酬がなければ協力関係は長続きしないでしょう。そういう認知が必要です。

では、親子にあらわれるような交尾回避、インセスト（近親間に起こる交尾）回避はどのようにして形成されるのでしょうか。人間の社会では、家族をつくる上でインセストを禁止することが絶対に必要だと言われてきましたけれども、実は霊長類の社会では、普遍的にインセストは回避されています。それが、どういうふうにして起こるのか。

簡単に説明しますと、霊長類の集団はメスあるいはオスが集団を出ていく、自分の異性の親や異性の兄弟がいないところに行くわけですから、必然的にインセストをする機会を失うことになります。つまり、生まれ育った集団をどちらかの性が出ていくことによって、結果的にインセストが防止されている。でも、もう一つのインセストの回避があります。それは、親子兄弟が同居していても交尾が起こらない場合です。

これは人間についての話ですが、1981年にエドワード・ウェスター・マークという人が『人類婚姻史』を書いて、その中で、幼少時の密接な関係が、思春期以後に性的忌避を引き起こすということを言いました。ところが、この考えは、同時代に現れたフロイトによって抹殺されます。フロイトの基本



的な考え方というのは、幼児の性的な欲望はまず近親者に向かう、それが同性の親、特に男の子の場合は父親によって禁止するためにコンプレックスを起こす。そのエディップス・コンプレックスを乗り越えることが正常な成長にとって必要なことだというような説を唱えたわけです。これが一般には受け入れられ、ウェスターマークの説は忘れられていきました。

しかし、1990年代になって、ウェスターマークの説が立証されます。台湾にシンプワという幼児婚があるんですが、アメリカの人類学者のウルフという人が数千例を調べて、幼児の間に将来結婚すると約束させられて同居をした夫婦には子どもがなかなか生まれない、あるいは離婚率が非常に高いということを報告しました。

また、それより前の70~80年代に、イスラエルのキブツで調査をした研究者がいました。キブツというのは、もともと集団育児を目指してつくられた組織で、将来彼らが結婚してキブツを担っていく世代になると期待されていたわけですが、彼らはほとんど別のキブツの異性と結婚するようになりました。つまり、幼い頃に一緒に育った子どもたちが性的な忌避関係を起こす例として、キブツの事例が上げられたんですね。

これを、霊長類で1950年代に立証した人がいます。私の大先輩の徳田喜三郎さんが、動物園に暮らしているサルで、母親と息子の間には普遍的に交尾が起こらないという現象を見ました。1980年代には餌付けされているニホンザルで3親等以内の血縁者間には交尾が起こらないことが実証されました。また、1990年代にはそれを徹底的にバーバリマカクで調べた人がいます。その結果から、血縁関係にあっても幼児期に密接な関係を持たなかった雌雄は交尾をするということを見出しました。逆に、血縁関係がなくても、幼児期に密接な関係を持った雌雄は交尾を回避するのです。つまり、血縁ではなく、育ての親がインセストを回避する対象になるのです。

このことは、ゴリラでも立証されています。育児をしたオスと育てられたメスは、父親と娘のように交尾を回避するのです。バーバリマカクの例では、1日3%以上の接触が6ヶ月続くと、その子どもがメスだった場合、思春期に達しても育児をしたオスとの交尾は回避することが報告されています。霊長類の幼児期の親和的なつき合いは、どうも異性間に性的な忌避関係をつくるということに貢献しているようなのです。

また、幼児期の親和的なつき合いは、もう一つ、同性間に決定的なライバル関係に陥るのを防ぐことにも貢献しているようです。それが、どういう関係によってつくられるかというと、遊びと性的な遊びがそれを助けているのではないかというのが我々の推測です。

## 類人猿の対面コミュニケーション

さて、もう一つ、類人猿のコミュニケーションで皆さんにご紹介しておきたいのは、のぞき込み行動、顔を見合わせる行動です。この顔を見合わせるという行動は、実は類人猿以外のサルにはあまり起こらないんです。相手の目を見つめるというのは相手を威嚇することになるからです。ところが、類人猿の場合は、たとえば食物分配をする時、相手に食物をねだって手を差し出す前に、相手の顔をじっと見つめといったことをします。普通なら緊張関係になるところを、相手の行動を制して自分の要求を相手にのます、そういうことが起こるわけです。

たとえば、ヒヒの場合は、相手を見つめる行動は威嚇になりますから優位なもの特権です。劣位なものは、見つめられれば目をそらすか、歯をむき出して相手にへつらって劣位であることを示さないと攻撃されてしまいます。ところが、そういう目をそらしたり歯をむき出したりする行動がゴリラでは起こらないのです。ゴリラには、自分が劣位であることを示す顔の表情はありません。仲裁者があらわれたら、優位者が抑制して行動をやめるということになります。

また、類人猿の対面的交渉では、同じ行為を同時にすることが多い。我々人間も、おじぎをしたり握手をしたり鼻をこすり合わせたりというように、同じ行為を対面して同時にします。そういうことが類人猿段階でかなり頻繁に起こるということは、人間も含めて、類人猿に特徴的なコミュニケーションの方法なのかもしれません。

そして、対面しているということは、相手の意図を推しあることにも役立っているようです。相手が何か考えて行動しているということを仮定して、自分の行為を調整するのです。これを心の理論と言います。相手が心を持っているということを前提にして付き合うということが、この理論の原則です。そういう能力を、類人猿は持っているわけです。

## 都会のゴリラ

こういったことは、ゴリラでも人間でも子ども時代にさまざまな接触を通じて社会的な環境に慣れることによって学んでいかなければなりません。では、都会のゴリラはどうでしょうか。

これは、日本の都会のゴリラです。真ん中が上野動物園で生まれたモモタロウ、いまは千葉動物園にいます。左上が東山動物園で生まれたアイちゃん。右側の鏡を見て自分の姿にうつりしているのは、千葉動物園のオスのゴリラです。多くの都会のゴリラは、たいていは2頭、多くても4~5頭の群れで暮らしていて、1頭でずっと暮らしているゴリラも多いんです。



こういった都会のゴリラは、まず多様な自然環境情報を知りません。それから、変化する自然というのを知りません。私の友達で、上野動物園の飼育係をやっていた黒鳥さんから聞いた話ですが、ブルブルというゴリラを新しく土を盛った園舎に初めて放したら、土を怖がったと言っていました。コンクリートしか知らない都會のゴリラは、土という変にやわらかいものに非常に違和感を覚えたわけです。そういうことが都會のゴリラでは起こる。

それから、自然にいるゴリラは、どういう場所にどういうものがあるのかということについてのメンタルマップ、地理情報を頭に入れているのですが、都會のゴリラはそういうものをつくることができません。また、人工物に囲まれて暮らしていると、同じものと同じようなものを区別することができます。私たちは、同じようなものを1つのカテゴリーとして見抜く能力を持っていますし、もちろん自然に生きる野生のゴリラもそういう能力があるのですが、都會のゴリラにはそういう経験がありません。

そして、もう一つ重要なことは、危険への対処法を知らないということです。自然の中では、頼れる仲間は誰か、自分に影響する社会関係はどういうものなのか、逆に自分が影響する社会関係は何かといったことを学んでいきます。ところが、都會のゴリラは小さな集団、あるいは単独で育てられていたために、そういったことを経験できません。つまり、自分で認めてもらうためには自己主張をしなくてはいけないけれど、そればかりでは相手から協力を引き出せないので、時には抑制して相手の要求をのまなくてはいけないという駆け引きを、都會のゴリラは学ぶことができずにいるに違いありません。

## 人間の子どもの不思議

では、ゴリラと人間の子どもの類似点にはどういったものがあるのでしょうか。これが、非常に類似点が多いんですね。特に、母親以外の多様な保護者を持つという点において、ゴリラと人間はよく似ているといってよいと思います。それから遊びが非常に多様で、長続きをする、相手が心を持っているということを前提にしてつき合っているという点でも、人間とゴリラの子どもはよく似ています。

ただし、違うことも多いんです。どこが違うかというと、人間の子どもは大きく生まれますが、なかなか育ちません。そのために手がかかる。けれど、乳離れは早いんです。1年でお乳を飲まなくなっちゃう。専門家の方々は何か思うところがあるかと思いますけれども、私は、これは随分大きな違いではないかと思います。それから、母親以外の仲間と小さいうちから広範に接触をする。これは、靈長類では人間の子どもだけの特徴です。

もう一つ、非常に重要な違いがあります。それは、目的とモデルを持って努力するということが、人間の子どもだけに見られるからです。ゴリラの子どもは努力する目的を持ちません。努力しろといっても、努力の対象がありません。多分、モデルを持たないんです。

オリンピックの選手は、小さいころから目標を目指して一生懸命努力をして自分の体をつくると言います。それほど人間の子どもの体というのは、可塑的にできている。努力をすれば変わるんです。そして、それには学習が必要であり、こうすればああなるんだというような洞察力、シミュレーションの能力が必要ですが、それを人間の子どもは小さいうちから持っている。恐らくそれは、言語がつくり上げた能力だらうと思います。

それから、もう一つ、ゴリラの子どもを長年見てきた私から見た人間の子どもの不思議は、価値のないものでも分類したがるということです。うちの子どもの場合は、おもちゃの自動車を集めては分類していましたけれども、とにかく分類することが大好きです。石のような価値のないものでも分類してしまうというのは、何らかの進化の遺産を引きずっていると思います。分類するには、類似と相違を見分ける能力が必要なんですが、教えなくても人間の子どもにはそれが備わっているようです。ですから、それは人間の子どもにとって必要な、発達過程なんだろうと思います。

もう一つ重要なことは、生き物と人工物の違いを理解できることです。人工物というのは、同じ形でも用途によって違う言い方をします。たとえば、イスの足が取れていて背がなかったら、多分テーブルです。あるいは単なる板です。しかし、シマウマの足を取ってもシマウマです。生き物というのは部分が取れていても生き物なんです。その種の個体なんです。しかし、人工物というのは、部分が取り去られれば別の用途に生まれ変わってしまうし、状況が違えば別の言い方で言わなくてはならなくなります。そういうことを、人間の子どもはきちんとわかっている。それがゴリラの子どもと違うところです。

そして、アナロジーの情熱があります。私の場合、子どもに童話やお話を読み聞かせながら、初めの頃はあまりうそを言っちゃいかんなと思っていました。しかし、子どもたちは、その話を本当だと思って信じているわけではないんです。物語の中でゾウさんやカバさんが出てきて、人間のようにお話をしても、人間のような出来事を体験したりしますが、子どもたちは自然ではそういうことは起こらないんだということを、きちんと理解しています。これが、私には非常に不思議なことで、彼らはそれをアナロジーという方法によって非常に幅広く心の中に取り入れているのだと思います。

もう一つ、私たち人間は、子どもに対して教育をします。この教育をするということが、人間社会の非常に重要なところ



ろであり、特徴的なことです。ゴリラやチンパンジーの子どもたちは、人間の子どものように完全な模倣ができません。猿まねができるのは人間だけで、猿まねはサルの特権じゃないんですね。チンパンジーでわずかに現れる教育行動は、母親と子どもの間だけです。つまり、人間の子どもは、ゴリラやチンパンジーやオランウータンの子どもとは違って、学ぶことが可能な社会関係を持っているということがわかります。それがどういうふうにしてつくられ、どういうふうに機能していくのかということを、私は子どもの専門家の皆様に教えていただきたいと思っています。

都会の子どもは、多分いくつかの知識や体験は不足しているでしょう。先ほどのゴリラになぞらえた部分でいえば、自然についての知識が不足しているだろうと思います。特に重要なのは、総合的理解です。部分部分の理解ではなく、総合的にどう判断すべきなのかということを、自然の中では常に迫られます。それを多分、自然を経験していない子どもたちはできません。社会についても、恐らく言葉によらないコミュニケーションが都会の子どもは不得手だろうと思っております。

最後に結論めいた話をいたしますと、私たちは子どもたちに対して、過大な期待を抱いてはいけないのではないかと思います。私たち大人自身が、非常に無理をしてこの文明社会をつくっているような気がしてなりません。その意味でも、子どもにあまり無理を強いてはいけないのではないかということを、私は教訓として思っております。過去の野生の時代を振り返ってみると、私たち人類がこれほど過大なものを背負った時代はかつてなかったのではないかと思えるからです。

本当に重要なことは野生に隠されているというのが、私のこれまでの経験から言えることあります。ぜひとも皆さん

も機会があれば、野生のゴリラと都会のゴリラを見ていただいて、我々自身、人間というものを考え直していただきたいなど、不遜ながら思うわけでございます。

#### 【会場より質問】

ゴリラの世界では、親が子どもに対して虐待的な行動をとることがあるのかどうか、それに対して仲裁的な行為が入るのかどうかを教えてください。

ゴリラの日常生活では、非常に公平に子どもをかばうということが印象的です。たとえば、お母さんゴリラは自分の子どもが不利になれば自分の子どもを助けます。しかし、お父さんゴリラは、子ども同士でトラブルがあると、2つの原則でけんかをおさめます。一つは、やられた方を応援する。もう一つは、小さな方を応援するんです。しかも、えこひいきということをほとんどしません。何か原因があると、必ずその原因を押さえようとします。ですから、それは特別な子どもを助けようと思ってやっているわけではなくて、けんかそのものを止めようとしてやっている行動だというふうに理解できます。ですから、非常に公平だと思うんです。

ただ、ゴリラには子殺しという現象があります。特に乳児がオスに殺されることがあるんですが、起こり得る原因としては、子どもが殺されることによって母親のお乳の出が止まって発情を再開し、再び交尾ができる生理状態に復帰をする、それをオスがねらってやっているのだと解釈しているわけですが、まだ本当の原因が解明されているわけではありません。一方では、そういうことがあるということもゴリラの社会の特徴だと思います。



子どもの遊び